

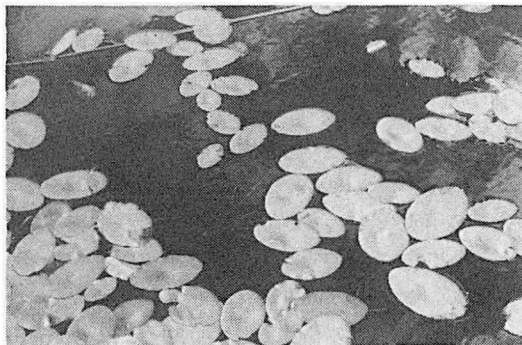
尾瀬沼のコカナダモ沼全面分布拡大 星 一 彰

尾瀬沼のコカナダモが分布を拡大しつつあることを報告(星、1983)したが、1984年9月30日調査してみると、沼北西端の沼尻湿原船着場で、新たに分布を確認することができた。1981年5月の発見からわずか3年5か月間に、ほぼ全面を覆ってしまったことになる。従来の水

生植物分布地に着々と分布を拡大してきた。

福島市での室内実験によれば、ある種のトビケラ類が好んで食べることが確認できたので、天敵による繁殖勢力の減退も考えられるが、現在のところ、センニンモなどが駆逐されつつあり、ヒロハノエビモと競争関係に入っている。沼の生態学や風景の破壊が心配される。

(福島県立福島東高校)



写真(左)沼北西端の沼尻船着場、(右)ジュンサイ水中(黒い部分)にはコカナダモが群落を成している(1984年9月30日)。

オニバスの結実について

—訂正とお詫び—

角野康郎

この会報の前号でオニバスの結実の問題にふれて、「Okada (1930) は、展開花より生じた果実は完熟種子をほとんど含んでいないことを指摘して、オニバスの種子形成はもっぱら閉鎖花によるものとした。」と書いた(25頁)。ところが、この引用は私の誤解にもとづくものではないかという指摘を受けた。確かに私の引用は適切を欠くので、この場を借りて訂正しておきたい(なお、1930年の論文は、御旅屋太作氏との共著であって、Okada & Ohtaya (1930) が正しい。この点でも不注意をお詫びしたい)。

さて、Okada & Ohtaya (1930) は、岡田要之助博士の一連の報告である「オニバスの研究(英文)」の第6報として発表されたもので、オニバスの開花習性、展開花と閉鎖花の差異を問題にしている。その中で、オニバスの展開花はサイズの上でも胚珠の数や大きさの点でも閉鎖花に劣ることを認めながらも、次のように述べている。

「……にもかかわらず、種子生産に関して展開花が不稔であるということはない。」その具体例として、展開花由来の果実が長さ17cm、幅8cm、種子98個を含んでいた場合があげられる。そして、「閉鎖花だけでなく展開花もまた、等しく完全な種子をつける」と結ばれている。この文脈からすれば、私の引用は岡田博士の主張を曲解したものと言わざるを得ないだろう。しかし、これは、展開花も完熟種子をつけることがあることが例証されているだけで、種子生産能における展開花と閉鎖花の優劣には言及されていないことも事実である。

岡田博士がこの問題について詳しくふれられたのは、『生態学研究』第4巻(1938)に載った「オニバスの開花に就いて」と題された論文においてである。展開花(岡田博士は「開展花」と呼んでおられる)由来の果実中には発育不良の種子ばかりであった例などをあげながら、「……開展花といえども絶対に完全種子を生ぜぬとは限らぬであろうが、少なくともその力が非常に弱いことは確で、従って種子を生ずるのは正常的には閉鎖花によるものと考えられる。」と結論される訳である。これが、岡田博士の最終的なお考えであったと私は理解している。

その意味で、拙稿においても、岡田(1938)を引用すべきであった。

岡田博士のお考えは基本的に正しかったことが、私の調査によっても確かめられた。この問題は、閉鎖花と展開花の種子生産における優劣を論じて終わるようなものではなく、オニバス(特に日本に遺存する個体群)の進化を解明する上でも、重要な糸口になるものであることを付記しておく。

末筆ながら、私の不注意を御指摘いただいた松井宏明氏にお礼申し上げます。(神戸大学教養部)

水草関係文献目録 (9)

<1974つづき>

浜島繁隆. イボウキクサ. 植研 49:359.
 原田市太郎. 水草の形態・細胞などのあれこれ. 遺伝 28(8):4-11.
 深泥池団体研究グループ. 深泥池-氷河時代のレリックをさぐる. 国土と教育 4(6):10-15.
 宮本水文. 深泥池の植物 I. 浮島のある池. Nature Study 20:38-40
 ———. 同 II. 近年になっての植物相の変化. Nature Study 20:110-112.
 三好功一. 刈木木湿原について. 植物と自然 8(1):8.
 百瀬忠征. 秋川のエロデア. 遺伝 28(9):84-89
 山下孝介. 南米スリナム“かわごけそう”探検紀行. 遺伝 28(1):57-62.

<1975>

石坂孝喜. ガマ(Typha属)の群落. 採と飼 37:227-229.
 今井徹郎. ハスの花と葉は浄土の思いをひめて. 植物と自然 9(7):2-4.
 薄葉 満. いわき地方の水生植物 I. フローラについて. 福島生物 No.18:33-36.
 上野雄規. 宮城県産タヌキモ科の分類と分布. 宮城の植物 3:1-9.
 上原 勉. シャジクモの栽培. 採と飼 37:194-195.
 大滝末男. オニバス東京都にも現存する. 植物と自然 9(8・9):18.
 ———. 千葉県の水草の生活. 「千葉県の生物」:55-60.
 ———. 水生植物の分布と生態. 『千葉県植物誌』

:216-232.

尾崎富衛. 佐瀨の自然環境(第1次予備調査)[植物を主とする自然調査]12頁
 櫻村利道・他6名. 裏磐梯五色青沼および竜沼における水生植物群落の物質生産. 国際生物学事業計画裏磐梯湖沼群研究グループ「裏磐梯湖沼群の研究」(福島県):127-136.
 角野康郎. シラルトロ沼、塘路湖、達古武沼の水生植物について. 釧路博物館報 No.236:128.
 木村信之. ふるさと植物記(ソクズとコウホネ). 植物と自然 9(10):5-6.
 楠元 守・園田幸朗・立山一夫・小池利彦. 水草を使った光合成教材の再検討. 科学の実験 26(10):55-61.
 小宮定志. 日本産タヌキモ科植物の解説. 食虫植物研究会誌 No.71:8-18.
 佐鳥英雄. <私の植物雑記 11>マコモ(いね科). 植物と自然 9(11):6-8.
 杉野孝雄. アカウキクサ線の提唱. 日本シダの会報 2(22):349-350.
 瀬戸 剛・那須孝悌. 日本産アカウキクサ属(Azolla)化石の発見と現生種についての知見. 大阪自然史博物館研究報告 29:51-60, Pls.4-7.
 達山和紀・江川 宏・三木和博・山本広基. ウキクサ科植物による水質検定 2. ウキクサおよびアオウキクサ増殖に及ぼす金属, 合成洗剤および有機汚染物質の影響. 山陰文化研究紀要自然科学編 15:23-33.
 豊田清修. 蓮実の工艺品. 植物と自然 9(7):29-31.
 知地英征. あっけしそうの化学成分-色の本体はベタシアニン. 化学と生物 13:701-703.
 長井真隆. 黒部川扇状地の水草と環境. 植物と自然. 9(2):11-13, 25
 長尾弓郎・藤岡章二・川西史明・松岡敏郎. 沢瀉の品質とサジオモダカの栽培に関する研究(その2)サジオモダカの栽培について. 武田研究所報 34:449-454.
 中沢信午. マリモの発見・分化・球化現象. 遺伝 29(10):79-85.
 浜島繁隆. 刈谷市井ヶ谷町小堤西池の植生. 「あげは」(愛知県立刈谷高校生物クラブOBあげは会) No.10:3-7.